

木 林 の仕事を考える SDG8×15

報告書

2021年12月17日(金)
15:00~18:00

Program

15:00~15:15 地球規模課題8の趣旨説明 [P02](#)

15:15~15:45

報告1



高野雅夫(環境学研究科教授)

農山村への移住者の姿に学ぶディーセントワークとは
——『自然(じねん)の哲学』の観点から [P03](#)

SDG8は「働きがい(decent work)も経済成長も」というものです。たんに雇用があればよいということではないということですが、では、ディーセントワークとはどのようなものかは十分に深められているわけではありません。日本ではここ10年ほど都会から若い世代が農山村に移住する姿があります。報告者は彼らはどのような働き方・暮らし方を求めて田舎にやってくるのか、たくさんのインタビューを通じて明らかにしてきました。都会での働き方に満足できずに田舎にやってきた人も多くいます。その姿のなかにディーセントワークとは何かを考えるヒントを探ってみたいと思います。

15:45~16:15

報告2



上村泰裕(環境学研究科准教授)

働くことの意味と保護
——持続可能なディーセントワークの構想 [P05](#)

ディーセントワークには、仕事の「意味」(内側から動機づける力)と「保護」(外側から支える力)の側面があります。ディーセントワークとは、意味も保護もある仕事のことだと言えます。この報告では少し視野を広く取って、働きがいのある仕事は歴史上いかに成立したか、その現状はどうかについて考えます。さらに、これからの社会における大学院の役割と、ケアワークやグリーンジョブといった、人間のウェルビーイングと自然環境の保全に関わる仕事を支えることの重要性について議論したいと思います。

16:30~16:50

特別インタビュー [P07](#)

善田洋一郎さん(富山県朝日町役場住民・子ども課移住定住相談員、元林業現場従事者)
聞き手…高野雅夫、上村泰裕

16:50~17:00

コメント [P08](#)

福井康貴(環境学研究科准教授)

17:00~18:00

討論



地球規模課題8の趣旨説明
上村泰裕(環境学研究科准教授)

環境と人間のウェルビーイング

手がかりとしての SDGs

これから「環境と人間のウェルビーイング」について考えていくための一つの手がかりとして、2030アジェンダの前文を引用します。

「私たちは、世界を持続可能で回復力のある軌道へと移行させるために緊急に必要とされる、大胆かつ変革的な行動を起こすことを決意しています。この団体旅行の出発にあたり、私たちは誰ひとり置き去りにしないことを誓います。」

SDGs(持続可能な開発目標)には複数の要素が含まれています。大きく分けると環境的次元と社会的次元に分類できます。この二つの次元はどうすれば両立できるでしょうか。

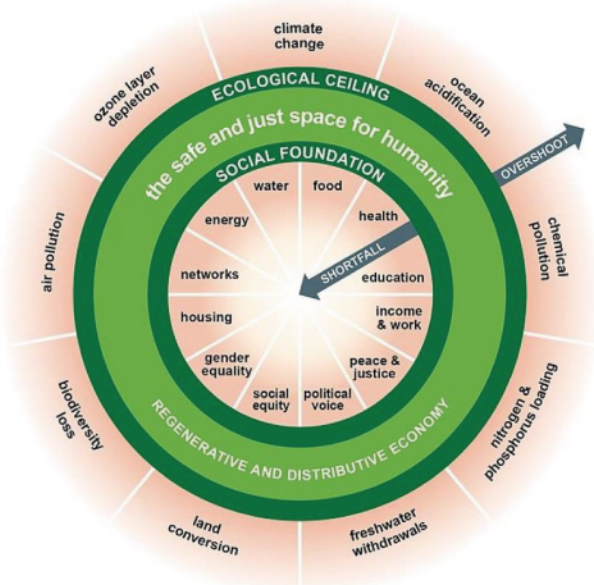
環境的次元

SDG6 水、7 エネルギー、11 居住、13 気候、14 海、15 陸

社会的次元

SDG1 貧困、2 飢餓、3 健康、4 教育、5 ジェンダー、8 仕事、10 不平等

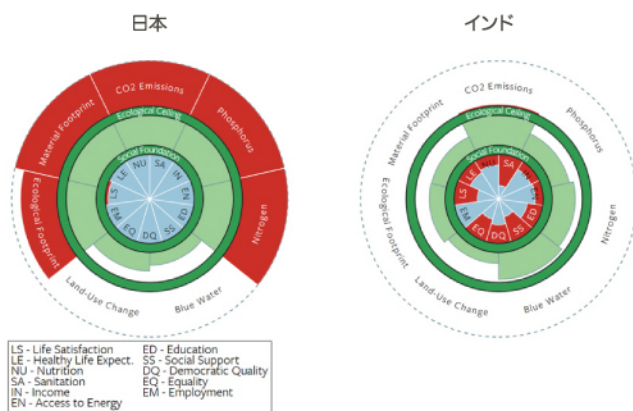
社会的土台と惑星的限界のあいだ



出所：ケイト・ラワース『ドーナツ経済学が世界を救う』

ケイト・ラワースが提唱しているドーナツ図では、外側に気候変動・気候崩壊・汚染物質・環境問題などの惑星的限界(planetary boundaries)ないし生態学的天井(ecological ceiling)があり、内側に自由・平等・福祉・教育・仕事・健康などの社会的土台(social foundation)があります。社会的土台と惑星的限界の間にある非常に細いドーナツの範囲に人間の活動を収めていかななくてはならない、両方を達成しなくてはならないと言っています。環境保護が大事だからと言って、これまで人間が作ってきた社会や、まだ解決できていない貧困や不平等などの問題をあきらめるわけにはいきません。惑星的限界

を考慮に入れたうえで、社会正義をどのように構想していったらよいか。例えば、環境税を導入すると貧しい人に多くかかってしまいます。社会正義も考慮に入れた環境政策を考えなくてはなりません。個々の取り組みだけでなく、社会全体としてどうしていけばよいかを考える必要がある。そういう問題意識を持っています。ちなみにリーズ大学のウェブサイトでは、各国が社会的土台をどのくらい達成しているか、惑星的限界をどのくらい逸脱しているかを簡単に国際比較できるようになっていますが、それによると、日本は惑星的限界をオーバーしています。一方、例えばインドは社会的土台が足りません。もちろん、細かく見れば日本の社会的土台にも問題はありますが、大筋ではそんなふう



出所：A Good Life For All Within Planetary Boundaries ©2021 University of Leeds

価値観を問う領域

牛肉は炭素排出量が多いそうですね。魚のほうが炭素排出量が少ない。だからと言って、牛肉を食べるのをやめて魚に置き換えるのに十分な漁業資源があるかはまた別問題です。いずれにしても、一人ひとりのエコな心がけだけで済む問題ではありません。例えば、世界全体で牛肉を食べるのをやめたら気温上昇を何度くらい抑えられるのか。そういう選択肢をトータルに示していく必要があります。そのうえで、価値判断の問題が出てきます。社会学の元祖の一人であるマックス・ヴェーバーは、「政策的な問題では、目的達成の手段を考えるだけでは済まない。価値観を問う領域にふみこんでいるので、まさに判断基準となる価値そのものが争われざるを得ないのだ」と言っています。環境政策にしても社会政策にしても、決まりきった目的の達成手段を工夫すればよいという技術的な話だけでは済みません。むしろ、どのような目的をめざすべきかという価値観が問われる。価値観の対立をはっきりさせ、どういう喧嘩になっているかを分析して、対立を乗り越えていくためにはどうしたらよいかを考える、それが社会学的な政策研究の方法です。そのような方法で、環境と人間のウェルビーイングについて考えていけたらよいと思っています。

シンポジウム前半の録画をYouTubeで視聴することができます。

<https://youtu.be/F98j5rIHOTs>



高野雅夫(環境学研究科教授)

農山村への移住者の姿に学ぶディーセントワークとは

—『自然の哲学』の観点から じねん

ディーセントワークとは

上村先生から環境と人間のウェルビーイングという問題提起をしていただきました。ウェルビーイングの中で、働くことというのが大きな課題になっていて、SDG8にディーセントワークという目標が掲げられました。SDG8は経済成長とディーセントワーク、つまり、まずは雇用がなければいけないんだけど、単に雇用があればいいという話ではなくて、「ディーセント=やりがいのある」仕事をすべての人に提供しなくてはいけないという目標が掲げられました。では、ディーセントワークとは何なのか。我々が日々の実践の中からつむぎ出していくべき概念です。

日本の人口の歴史と予測

日本の人口の歴史と予測

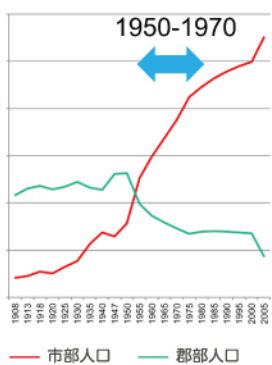


平成21年度国土交通白書(国土交通省)より

江戸時代後半、人口は3,000万人ぐらいでほとんど変わりませんが、明治に入ってから急激に人口が増えました。いわゆる成長の時代です。現在はそれがピークに達して減りはじめたという、歴史的な時代に私たちは生きています。明治維新以来150年の時代の変わり目です。近代化の中で、都市と農山村の人口はどんどん変わっています。

今から100年ぐらい前は8割ぐらいの人は田舎に住んでいて、2割ぐらいの人が都市に住んでいましたが、それが拮抗するのが1950年代です。それ以降日本は高度経済成長になってどんどん都市の人口が増え、田舎の人口は減っていくという推移を示しました。それが過疎問題です。愛知県の豊根村では1950年代に一番人口が多くて、そこから減り始めています。その大きな要因は、10代後半の若者が村を出て帰ってこないことにあります。30、40代の親世代は生まれた人の20%ぐらいしかいません。その結果、70、80代が一番多くて、若い人は極端に少ないという人口構成になっています。風景もずいぶん変わりました。もともとは田んぼだったところが、やり手がいなくて放棄されています。今から50、60年前に一瞬懸命木を植えた人工林も、その後管理されずに放置されて、真つ暗な、生態系としては劣化した森林になってしまっています。人がいなくなった空き家は植物にのみ込まれていきます。

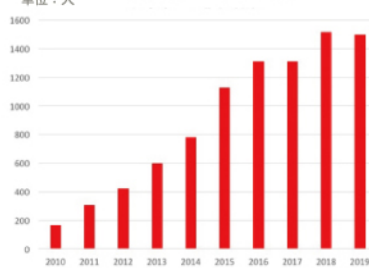
都市 / 農村人口推移



移住ブーム

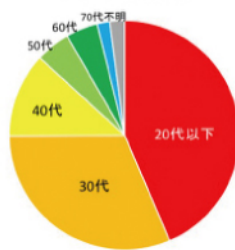
2010年頃から移住ブームが始まりました。政府が農山漁村に関する世論調査の中で、「農山漁村に定住する願望がありますか?」という質問をして、この10年で特に関心が上がったのが30、40代の子育て世代です。一番関心が高いのが20代。若い世代に田舎への移住定住への関心が高まっています。では実際はどうでしょうか。行政が田舎への移住に様々な支援策を準備しており、岐阜県でその利用者数を数えると2010年から始まってうなぎ上りに上がっています。移住した人の世帯主の年齢構成を見ますと、20~40代で8割近くを占めています。田舎への移住というと定年退職後に悠々自適というイメージがありましたが、30、40代の子育て世代が子どもを連れて、それから独身の20代が来ています。

岐阜県への移住者数



出典 岐阜県発表資料

移住者年齢構成



なぜ移住してくるのか

ではなぜ移住してくるのでしょうか?総務省の「現在お住いの地域に移住したのはなぜですか」というアンケートには、「気候や自然環境に恵まれたところで暮らしたいと思ったから」とか「都会の喧騒を離れて静かなところで暮らしたかったから」という答えが多いです。面白いのが、「それまでの働き方や暮らし方を変えたかったから」という方が結構いらっしゃいます。いろんな人生の転機に田舎に移住するという選択肢が出てきたということですね。移住してきた人に同じように私が話を聞くと、みんなさんがいうのは、自然豊かな環境の中で子育てをしたいということ。お子さんが小学校に上がる直前ぐらいで移住してくる方が多いです。それから、環境に配慮した暮らしや、できるだけ自給自足をするような暮らし方がしたいとか、都会のオフィスでの仕事よりもやりがいのある仕事をしたいという話をよく聞きます。「やりがいのある仕事」ということばが出てきました。ディーセントワークのヒントがあるかなと思いますので、さらに深く話を聞いていくと、都会の暮らしでは地域社会に参加する機会がなくて、隣に住んでいる人もよく知らないけど、田舎は集落の人との付き合いが濃厚で、自分が受け入れられ期待されている感じがするので、非常に気持ち良い。都会の大企業で働いてた方で辞めてきている人もいますが、自分がやっている仕事で社会をよくすることに貢献しない、むしろ悪くすることに繋がっているのではないかとこの疑問が生まれ、その疑問に耐えられなくなって、やめて田舎にきたという人たちがいます。

移住ブームの意味

移住ブームの意味を考察してみます。まず、いい学校に行ったら大企業に行けば人生安泰という方程式が高度成長時代にはあったけれど

も、人口が減り始めた今、大企業も終身雇用・年功序列は維持できなくなってきています。そこが信じられなくなった時に、都会で働く事の厳しさや将来の不安から、自分らしく働けていないという不全感が高まってきたのだと思います。それから、都市で子育てする事の難しさ、若いお母さん方の厳しい状況。自然とか地域コミュニティへの枯渇感を背景に、新しい価値観とかライフスタイルが生まれているのではないかと思います。彼らの価値観、ライフスタイルが持続可能な社会を作るために必要なものだと思ってきました。単に人が増えればいいという話ではなくて、田舎に新しい価値観とかライフスタイルが生まれているのではないか、ということに私は興味をもっています。

移住者の職業

では、移住してきた人たちはどんな仕事をしているのでしょうか。豊田市が空き家情報バンクを利用して移住した方にアンケート調査をしました。世帯主の職業を聞いたところ、農林業を専業でやる人はあまり多くなくて1割ぐらい。一番多いのは会社員です。豊田市の場合は車で1時間ちょっと走れば、豊田の街中まで行けます。お父さんが少し長距離の通勤をしながら、会社員として引き続き働くという方が半分くらい。自営業、自由業、派遣パートアルバイト、家事専従、無職という方を足すと3、4割ぐらいになりますが、この人たちを観察すると「多業」が実態だろうと思います。多業とは、1つの会社に勤めるのでもなく、起業でもない。いろんな仕事をして稼ぐというものです。私の知り合いで旭地区に移住した20代の男性は、名古屋での仕事を辞め、豊田市旭地区にふらっと移住してきました。彼がまずやったのが、Tシャツを作ることです。We Love 旭 Tシャツという地域に対する愛情を表現したTシャツを作って売りました。大学のサークルでこういうことやっていて、面白がってやってみたら結構ウケて、地域のイベントとかお祭りに行くと、子どもも大人もみんなこのTシャツを着ています。それから、彼は大学生の時にやってたイベントなどの音響の仕事をやりたくて機材を揃えました。地域のお祭りとかイベントがあり、その時にお声がかかります。また、旭地区の観光協会が人手が足りないので手伝って欲しいといわれて手伝ったり。そんな頼まれ仕事も結構あって、1年稼いでいる間に自分なりの事業をやりたいということで、アサノエンタープライズという会社をつくり、今やっています。

仕事はつくるものではなく、できるもの

田舎で仕事をどう作るかっていうのも過疎問題の1つの大きなテーマです。一番古い考え方は工場を誘致するというもの。確かに工場は1960、70年代に結構田舎にできました。かなり撤退しましたが今でも残っている工場があります。しかし人手が集まらなくなってみんな困っています。実は地元の若い人たちは、そういうところで働きません。2番目に出てきたのが、6次産業化です。生産物をつくるだけじゃなく、加工とかサービスまでやって付加価値をつけようというものです。これもうまくいなくて、やり手がいらない。高齢者が半分生きがみたいにやっていて、ちゃんとした給料が出ていないので、若い人は一緒にはできないのです。今、移住のホットスポットで現実に起きていることは、農的な暮らしがしたいとほぼ失業状態で田舎に来て、地域に馴染んでいくと頼まれ仕事がいっぱい来ます。みんな人手不足なので、季節の

仕事とかを手伝っていると、さらに地域に馴染んで自分のスキルも向上して地域のニーズもわかってくるし自分がやりたいこともはっきりしてくる。自分なりの仕事ができるという姿です。

多業から天職へ

頼まれ仕事をやって、その中からこれ面白いな、とか意外とこれできるかも、というものが分かってきて、その比重が大きくなっていきます。最初はアルバイトだけど、だんだん自分の事業として自営業になったり会社をつくったりという姿があります。だけどそうなるもやっぱり頼まれ仕事も結構あるというのが実態だと思います。それを「多業から天職へ」と呼んで、最初から自分がやりたいということではなくて、頼まれたことなんだけれども、だんだん自分がやりたいことになっていくという姿があると思います。天職っていうのは、やりたいこととやってほしいこととできることが重なったところだと思うんです。普通はこの3つがバラバラで、重ならないのでみんな悩むのですが、地域の中で仕事しているうちに、だんだんこの3つが重なってくる、その真ん中の天職が見えてくるという姿があります。

林業という働き方

次に林業という働き方について考えてみたいと思います。移住者全体の10%ぐらいの方が専業で農林業をやっています。林業は、3、4%ぐらい。日本の林業は衰退していると思われがちですが、2000年代に底を打って、今は回復基調にあります。林業の従事者は高齢化していましたが、2000年ぐらいから急に若返り始めました。新規就業者の推移も2000年過ぎた頃に急に増えてます。新しく林業従者を雇用した森林組合や林業会社に対して、政府が3年間人件費を補助するという「緑の雇用」という政策の影響です。都会でモヤモヤして仕事を辞めて、自然の中で体を動かす仕事をしたい、という若いひとたちが林業に参入してきました。しかし、林業の現場は昔のように牧歌的ではありません。大型の機械を使います。問題になるのは労災です。1,000人に対する休業4日以上¹の死傷者の割合を労災率といいますが、林業はほかの業種に比べて1桁多くて年間20~30人の方が死傷しています。岐阜県東白川村の若い林業従事者に話を聞くと、仕事は非常に充実していて、ほかの人が入れない山の中で仕事ができ、山菜取ったりバーベキューやったり楽しくてもう都会の仕事には戻れない。給料は確かに安いけど、木材の市場価格を見るとよくやってもらってると思う、という意見を聞きました。気になったのは、木を伐って出荷すること自体にやりがいがあるという話は聞けなくて、そこはやりがいを感じてないのかなと思いました。森林組合からは、せっかく雇っても4、5年で辞めてしまう人が多くて、技能を身につけて一人前になった頃に辞めてしまうので、雇う側としては非常にづらいというお話を聞いています。都会から田舎に移住して憧れの林業に就いたのになぜやめちゃうのか。辛抱が続かないとかそういう個人の問題ではなく、社会の構造的な問題だと思います。そこに「ディーセントワークとは何か」を考える手がかりがあると思います。



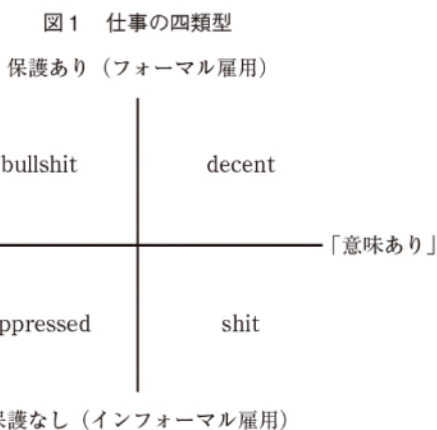
上村泰裕(環境学研究科准教授)

働くことの意味と保護

— 持続可能なディーセントワークの構想

ディーセントワークの困難

ディーセントワークというのは、国際労働機関(ILO)が提唱する「働きがいのある人間らしい仕事」のことです。自分の仕事にどんな意味があるのかと悩む人が多くなっています。その一方で、仕事の意味なんてどうでもいいから、労働条件や安定雇用を保障してくれという人もいます。意味も保護も頼りなくなっていると感じる人が増えているのではないのでしょうか。SDG8では、すべての人に「働きがいのある人間らしい仕事」を保障することを目標としています。ILOのホームページには、「ディーセントワークには、生産的で適正収入をもたらす仕事の機会、職場の安全と家族の社会保護、人格の成長と社会統合の見通し、人々が懸念を表明したり、組合を組織したり、生活に影響を及ぼす決定に参加したりする自由、すべての男女のための機会と待遇の平等、が含まれる」とあります。仕事における保護の側面だけでなく、仕事を通じて成長できる機会があることや、社会に参加しているという感覚が得られることもディーセントワークの条件です。これらは仕事の意味と言ってよいと思います。ディーセントワークとは、意味も保護もある仕事のことです。意味というのは私たちの内側から動機づける力のこと、意味のある仕事をやっているからやる気がわいてくる。保護というのは外側から支える力で、安心して働けるように支える制度です。意味も保護もある仕事は、働きがいのある人間らしい仕事です。グレイバーによれば、本人が意味を感じられない仕事は、たとえ保護があっても「ブルシットジョブ」(クソどうでもいい仕事)になります。そういう仕事が最近増えているんじゃないかということが言われはじめています。一方で、やりがいはあるけれど給料は低い仕事を「シットジョブ」と言います。それらをどうしたらディーセントワークにしていけるでしょうか。



働くことの意味

社会学者の尾高邦雄先生が『職業社会学』(1941年)という本で、職業には三つの要素があると述べています。生業と天職と職分です。生業というのは、生活が成り立つだけ稼げる仕事です。天職というのは、仕事を通じて自分の個性や才能を発揮できることです。職分というのは、仕事を通じて人間関係のなかで役立つという感覚が得られることです。天職と職分が働くことの意味、つまり働きがいと言えるのではないのでしょうか。会社人間と言われる人は、組織のなかで役立つ

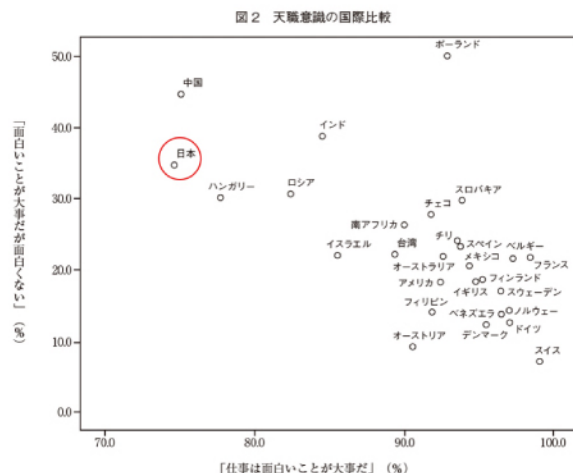
ことに喜びを感じている職分人と言えるかもしれません。それに対して、仕事人間と言われる人は、自分の得意なことを仕事にしている天職人かもしれません。ただし、こういう話をすると仕事ばかりになってしまうのですが、もちろんワークライフバランスも大事です。世のなか仕事だけではありません。仕事とは別の社会参加、趣味や家事や子育ても大事だと思います。

働くことの保護

一方、働くことの保護の側面を見ると、「働かざる者食うべからず」というのはヨーロッパでは16世紀の宗教改革以降の話であって、それまでは働かずに食べている人は結構いました。働けない人はどうするのか。働けない人の保護は、じつはヨーロッパでは6世紀から修道院で行われていました。福祉施設みたいなもので、孤児院と老人ホームと障害者施設を兼ねていました。しかし宗教改革が始まり、福祉は世俗の自治体がやることになって救貧法ができました。代表的なのはイギリスで、救貧制度が発達して、困ったときには公的な福祉制度に頼ることができるようになりました。そうすると、都会に出て働こうという人が出てきました。公的な救貧制度がイギリスの産業革命を促進する要因の一つになった、と産業革命史家のリグリが言っています。日本資本主義の父である渋沢栄一は社会事業の父でもあり、東京市養育院という児童福祉施設を運営していました。その渋沢が、イギリスと比べて日本には公的な福祉制度がなく、働けなくなった人の世話を家族や親戚に委ねていて、効率が悪いのではないかという意味の指摘をしています。

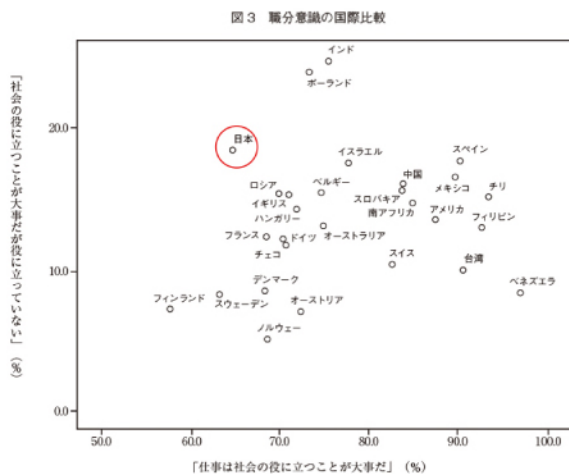
意味喪失の危機

最近、仕事の意味が失われてきたんじゃないかという危機感を持っている人が多い。戦後、福祉国家の制度ができて、多くの人が正社員の仕事に就けるようになり、意味も保護もあるディーセントワークが確立したかに思われたのですが、デヴィッド・グレイバーが「ブルシットジョブ現象について」(2013年)というエッセイで、稼げるが仕事を通じて社会の役に立っていないと感じる人が多くなってきていると述べました。しかし、ブルシットジョブは本当に増えているのでしょうか。



国際比較データを分析してみると、日本では面白い仕事をしたがる人の割合が低い。面白いことが大事だと思うけれど自分の仕事は面

白くないという人も多いです。そして、役に立たなくても稼げればよいという人も多し。役に立つことが大事だと思うけれど自分の仕事は役に立っていないという人も多し。国際的に見て、日本はあまりよい位置にいません。自分の仕事は面白くないし役に立っているとも言えないという人の割合を計算してみると、日本は30%近くで世界一、ブルシット度世界一です。



大学を中心につなげる社会を

そうした趨勢をふまえたうえで、今世紀後半、これから30~50年後の未来に向けて、働きがいのある人間らしい、意味と保護のある仕事をどうしたら持続可能なものにしていけるか、今から考えておく必要がある。たんなる公共事業では天職や職分の追求機会として不十分なので、ベーシックインカム(基本的な生活費の保障)と社会的投資(やりがいのある仕事をできるように応援する仕組み)を組み合わせる必要があると思います。その際、政府は企業ではなく大学に投資して、大学がクリエイティブ系の若者に天職追求の機会を与え、万に一つの成功から得られる収益を、生産性の上がりにくいケアワークやグリーンジョブといった職分に対する報酬にまわす。そのようにして、大学を中心につなげる社会を作っていくべきではないかと思ひます。

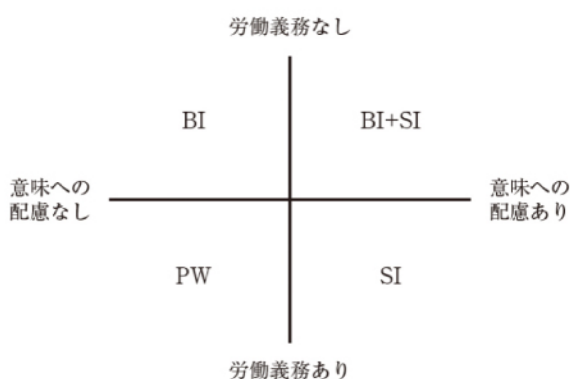
参考文献

上村泰裕, 2021, 「働くことの意味と保護 — 持続可能なディーセントワークの構想」『日本労働研究雑誌』第736号.
<https://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2021/11/pdf/077-086.pdf>

保護喪失の危機

保護に関しても、喪失の危機にあるのではないかと。ギグエコノミーと言われ、ウーバーイーツやクラウドワークのような、プラットフォームを通じた単発仕事が増えています。孤立した、しかも保護のない不安定な仕事が増えてきている。さらに、フレイトとオズボーンが「雇用の未来」(2013年)というレポートで、AIとロボットがアメリカの仕事の47%が奪うことになると予想しています。仕事も保護もなくなっていく。また、リチャード・ボールドウィンは、機械翻訳と通信技術が進歩すると、途上国の高学歴層が自国にいながら先進国の仕事を請け負うようになり、先進国のホワイトカラー仕事失われるだろうと述べています。それならクリエイティブな仕事をすればいいじゃないかという考え方もありますが、井上智洋さんによれば、クリエイティブな仕事は一部の成功者が利益を総取りしてしまうので、今よりさらに格差の大きな社会になってしまいかねない。

図4 社会保護の四類型



注: PW=Public Work, BI=Basic Income, SI=Social Investment.



特別インタビュー：善田洋一郎（富山県朝日町役場住民・子ども課移住定住相談員、元林業現場従事者）

profile

長野県出身。転勤族の家庭で育つ。
名古屋市内のNPO法人を5年半ほど経験。「人生に挫折」し、山奥を目指す。

同じ場所に長くともまれない習性もあり、豊田市の旭地区にたまたま吸い寄せられるように移住し、そこで林業と出会いました。奥さんと知り合ったきっかけで、奥さんの実家のある富山県朝日町に再移住しました。林業は富山県に来て7年くらい続けていましたが、朝日町は過疎地域に指定されていて、朝日町が主催した住民会議に参加したことがきっかけで、今は役場で移住定住相談員をして5年目になります。移住と一緒に空き家バンクの運営もやっています。

Q 移住してこられる方にどのような支援をされていますか。

住まいや仕事探し、飲み会のセッティングなど、結構なんでも支援しています。

Q みなさんのお仕事状況はどうでしょうか。

愛知からの移住者だと、トヨタ系の製造業に勤めてた方が多いです。富山に来て漁業に就く方もいますし、発電所がたくさんあるので電気関係の会社に就職される方もいます。農業や製造業、福祉系のお仕事もあります。高野先生のお話にもありましたが、一昔前に地域活性化として企業誘致があり、現在朝日町にある4社の製造業が軒並み人手不足で、就職口はどこにでもあります。

Q 善田さんの場合、林業でしたね。

私の場合、名古屋で挫折して田舎へ行くこと以外何も考えていませんでしたが、移住先の近所の人が心配してくださって、雇用政策のある林業を勧めてくれました。農業は趣味でできるけど、林業は学ばないとできないからと。私みたいにポップでライトなノリで林業を始めていいのかなとは思いましたが、民間の小さい会社が入り入れてくれたので始めました。

Q 林業ってどんなことをするんですか。

木を伐る仕事なんですけれども、結構幅広いんです。公園の草刈りを手伝ったりとか、樹木の剪定、山を伐り開くという仕事もありました。多くの人が思い描くのはたぶん木材生産の現場だと思いますが、実際はなんでも屋さんです。

Q チェーンソーを使うの、最初はビビりますよね。

ビビります。死亡する確率が高い産業で、国の雇用制度で集団研修を受けてひたすらいわれたのが、いかに危ないかということです。技術が大事なので一生懸命テキストを読み込みました。

Q 昔は教えてくれませんでしたよね。

背中見て覚えるみたいな世界。

そうです。実際、最初に現場に行ったのが研修の前だったんですけど、その時はチェーンソーを渡されてじゃあやってといわれました。これは死ぬなど直感で思い、慌てて調べました。

Q 一人前に木が伐れるようになるまでにどれぐらいかかりましたか？

思ったようにコントロールできるようになるまでに1年ぐらいはかかりました。

Q なるほど。そのあと富山に。

そうです。林業を続けるために、森林組合を選びました。

Q 中途就職ですよ。

はい。大歓迎されました。架線作業といって、ワイヤーで山に線張って、木材を里へ下ろしてくる仕事をしていて話したら、びっくりされました。あまりできる人のいない作業の経験者、即戦力として期待していただけた。

Q 林業ってチームワークで働くんですか？

作業内容によって全然違います。木を間引く伐り捨て間伐という作業とか、目的の樹種以外を全部切る、除伐・下刈りという作業は個人作業です。搬出はチーム作

業で、個人作業からチーム作業に切り替わるところで挫折する人が結構います。

Q 善田さんは森のお仕事で、実際に危険を感じたことはありますか？

7年間で2回、労働災害にカウントされる4日以上お仕事を休まなければならない怪我をしました。多分多い方だと思います。危ない作業の正しい処理の仕方を教えてもらうのですが、現場の感覚からするととても現実的じゃない。その方法では時間がかかる。ちょっとリスクを負うと早くできる。リスクのある作業を繰り返して行くので、いざ事故するだろうという自覚はありました。報酬に見合う仕事をするために、安全と効率を天秤にかけてました。

Q 善田さんからみて、林業のやりがいと、ちょっとこれは無理と思われたところを教えてください。

木を伐る技術自体はすばらしいもので、それを習得できたことは非常に満足感がありました。思ったところに倒せたとか、作業効率良くてできると達成感を感じます。あと、何世代も前に植えられた木を次の世代に引き継ぐって感覚も、ストーリーとして美しいと思います。森林組合とか事業者側から山主さんに声をかけて木を伐らせてもらうのですが、売れば金になるからと植えられた木もあります。金にならないと分かった途端、放置。山主がどこにあるか知らないなんて山もあります。なので、なかなかやりがいを見出すのは難しいです。誰の何の為にこの仕事やってるんだと。立派なケヤキの木があって、私は残したいっていったんですけど、山がどこにあるかも知らない山主のために邪魔だから伐れといわれて。勉強すればするほど果たして杉林が日本のためになっているのか疑問です。杉よりも広葉樹の方が保水力があり、地面を守る力があるっていうのは知られているのに、治山事業で土砂崩れを防ぐためにひたすら杉を植えるんです。しかもその杉を守るために下から生えてきた広葉樹を伐っちゃうんです。コントロールできるのは杉なので、それ以外の木を伐るんだと説明を受けました。私は納得いかなくて、最終的には広葉樹を残してもらいました。

Q 山主さんのためでもないんですね。

そうです。結局最終的に突き詰めていくと、やりがいをお金に変えるしかないんです。結局、お金をいかにたくさん得るかをやりがいにするしかなくなっていく。社会的意義を見出そうとしても見出せませんでした。お金の逃げるしかモチベーションをキープするものが残らなくて、林業無理だなんて思いました。

Q 収入的には満足のいくレベルだったんですか？

1日働いて7,500円とか8,000円ぐらいからスタートします。大ベテランさんで、16,000円から20,000円ぐらいだと思います。危険をしょってやっている仕事にしては安いと思います。

70年代ぐらいまではもっと高かったんですが、木材の価格が下がり、現場の報酬も下がってやりがいの搾取という面が出てきています。

Q 現場にお勤めですが、紆余曲折あって役場から出ようと考えられているとお聞きしました。

役場5年目で、空き家の仕事もたくさんさせてもらって、課題が見えてきました。朝日町にとってどういう人が求められるのかなと思ったとき、人口が今11,000人ぐらいの街で、役場の職員が大体130人ぐらいの規模なんです。役場の存在感が非常に大きいです。何でも役場主催が当たり前という状況です。第3セクターとかNPOが全然機能してない地域です。役場と連携できる民間人っていうのが非常に貴重されるんじゃないかなという考えが芽生えて来ました。今年度で退職してNPO法人を立ち上げて、移住と空き家の仕事を業務委託してもらおうと思っています。

Q 職分と天職が重なってきた感じですね。

そうですね。空き家の仕事には空き家を管理する作業がついて回ります。庭の木が大きくなってきたから伐って欲しいとか、草ぼうぼうだから刈ったほうがいいとか付随してくるので、私が今までやってきた林業の知識が役に立ちます。うまく繋がっていて、自分の経験をもとに自分の役割が見えて来ています。

なるほど。4月からいろいろお話を聞かせてもらって、天職になっていく様子を是非拝見したいと思います。



コメント
福井康貴 (環境学研究科准教授)



まとめ
高野雅夫 (環境学研究科教授)

田舎流のセーフティネット

善田さんの話で、何も決めずに行ったけど、行けばなんとかなるといふ田舎の懐の深さに興味をもちました。私の研究分野だと、公共職業訓練や生活保護など、労働政策や社会政策の仕組みがセーフティネットとなっています。それとは違う、田舎には田舎のセーフティネット的なものがある、次の仕事にスムーズに移行できるようなキャリア形成の仕方があるんだというところが興味深かったところです。

天職の見つけ方

二人の先生のお話の中にキーワードとして天職という言葉が出てきましたが、同じ天職を目指すにしても、やり方、道筋が違うのかなと思いました。村の中の人間関係とか、生態系みたいなものを土台に、さまざまな地域のニーズに対してやりたいこととできることがマッチして天職につながっていく、多業から天職を見つけていくというやり方。それに対して、ベーシックインカムと社会的投資、それに大学への投資をして、社会政策を重視しながら天職をつくっていくやり方。対照的だなと思いました。どちらも日本の会社のやり方とは違っています。日本の会社はメンバーシップ型の雇用になっていて、会社のニーズでやってほしい仕事を与えられて、その仕事内容に自分で価値を見出していくやり方です。お二人の構想は、日本の標準的な天職の見つけ方のオルタナティブになっていると感じました。

森の仕事のやりがい

グリーンジョブをディーセントにするにはどうすればいいのか。特に生態系と調和した形で、意味と保護がある仕事をいかに構想していくか。人間の都合で杉を植え、広葉樹を切るなど、意味を見出せないような状況がある中、林業のやりがいはどのように達成されるのかなということ考えさせられました。

雇われるでも企業でもない働き方

田舎もローカルベンチャーといって田舎の資源を活かして起業するという流れがあります。しかし、都会でも田舎でも起業はハードルが高くて、田舎に来た人みんなができるわけではありません。無理のない形で自分の生業ができ、それが天職とか、やりがいのあるものになっていくという道筋が自然発生的に生まれてきていると思います。今の移住ブームで一つのパターンになってきたという感じがします。社会政策の中で、こういうあり方があるということがまだ十分に知られていないだろうと思います。外部からどう支援したらいいかという観点もあります。起業ではなく、雇われるのでもないけれども、収入もやりがいも得ていくための支援を試みています。お金があればいいという問題ではなく、一番のポイントは、ネットワークをどうつくっていくかってことなんです。地元の人との関係もそうだし、移住してきてこれから仕事をつくらうという人たちのネットワークも大切です。

やりがいのある林業をめざして

林業に関していうと、自伐型林業というのが最近出てきています。これが目指してるのは、効率だけを求めてやるのではなくて、間伐をしながらこの山を100年後200年後どうつくっていくか考える林業のあり方です。誰のためにやるのか、何のためにやるのかということにフォーカスしたやり方であり注目しています。ヨーロッパでは森林官(フォレスター)という仕組みがあって、森林のデザインがしっかりしています。森林の責任者としての森林官が地主さんとか地域の人たちと話し合いながら、山の計画を決めていきます。山主さんはその森林官が決めたことに従わないといけません。森林官になるには中学校ぐらいからルートが分かれ、大学に行かないルートです。現場で経験を積んだ人しかありません。林業関係の最高の職種で、給料も良いし権威があり尊敬される存在です。大学に行かないルートで尊敬され収入も高い、そういう目標になる仕事があるのがいいですね。日本もそうなると思います。

第1回シンポジウム

「森の仕事を考える ― SDG8×15」報告書

名古屋大学環境学研究科・地球規模課題8「環境と人間のウェルビーイング」

2022年2月1日発行

名古屋大学環境学研究科

464-8601 名古屋市千種区不老町

e-mail kamimura@nagoya-u.jp

